

月曜評論

ここ数週間、世界の主要国に相つた政治権力者のドラマチックな失墜ぶりは、国際社会の將來に不吉な陰影を投げかけずにはおかない。

ボンビドー大統領をその死によつて失ったフランスの混迷、カエターノ独裁政権の崩壊をもたらしたホルトルガルの政変については、一応それなりの受け止め方ができるとしても、フランス

首脳は、米中接近に先がけての中加国交樹立にみられるカナタのスマートな外交、世紀の外交といわれた米中首脳会談、ヨーロッパの安定に一時代を画し、東西冷戦時代の最後の終幕を

しかも、これら三首脳を襲った危機は、共通して内政面にあるとすると、首脳外交時代の

は得意の社会民主党政権に過ぎない。わいふたぬ発想によって、国民的支持のもとに東西ドイツ間の平和共存と対、対東欧諸国との現状維持をとりきめた「東方外交」を成功させ、ノーベル平和賞まで得たのであるが、最近、内政面では大きく行き詰まっていた、あけくのは首脳

権力が東方外交の交渉相手に背後に隠されていたこのものが、意味である。この点は、ソル

緊張緩和という、それ自体は何人も同じ得る出鱈目の目標に何かかわらず、その裏には力と策略の世界が大きく口をあけていたこのもつ不気味さである。この点は国際政治のもつ宿命のなめろ性という問題に帰着するのかもしれない。

第三には、ここ数年、「イメ

首脳外交時代の陥せい

ロパの安定に一時代を画し、東西冷戦時代の最後の終幕を確定させたといわれたプラント「東方外交」にみられるよう

交は対米離反の自主外交としてこれまで光っていたが、トルド

首脳は内政面について得点をあげることができず、不信感を

た二ツソソ政權は、いまや「味方」によつても見放されてしま

シの政治がもたらす情報社会の効用をフルに活用して展開された首脳外交が一巡して

は、どうであらうか。国際社会における一連の事柄も決して対岸の火災ではないように思われ



中嶋 嶺雄

(東大助教)